



TITLE:

<書評>André Kukla, Ineffability and
Philosophy, London: Routledge,
2005.

AUTHOR(S):

山森, 真衣子

CITATION:

山森, 真衣子. <書評>André Kukla, Ineffability and Philosophy, London: Routledge, 2005..
京都大学文学部哲学研究室紀要 2014, 17: 36-40

ISSUE DATE:

2014

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/196095>

RIGHT:

書評

André Kukla,
Ineffability and Philosophy,
London: Routledge, 2005.

山森真衣子

1. はじめに

語り得ぬもの。それは分野によっては不可欠の概念でありながら、ひどく捉えがたく、それについて論じることが自家撞着に陥るようにさえ思われる概念である。それゆえ、「語り得ぬもの」は多くの分野で用いられてきた概念であるにも関わらず、それについて正面から論じられてきたことはほとんどない。本書の目的は「語り得ぬもの」という捉えどころのない概念を判然と哲学的に分析し、その概念が整合的であることを主張することである。そして著者の真の主張はそれを一步発展させたものであろうと評者は考える。すなわち「神秘主義者の述べる『語り得ぬ直観』は受け入れられるべき真なる直観となりうる」ということだ。

「語り得ぬもの」という概念は不気味さと同時にある種の恍惚をも感じる深淵である。その淵に浸ることへの誘惑も多大にあったであろうに、著者は、語り得ぬ洞察や直観を得るということとはどのような体験なのかについて語るのではなく、語り得ぬものという概念はどのように把握されうるのか、どのように把握されるべきなのかについての考察・分析に徹している。著者のこのプロジェクトは興味深く、成功していれば非常に有意義なものである。しかしながら彼の議論には問題点が散見され、このプロジェクトが成功しているとは言いがたいと評者は考える。

2. 語り得ぬものについての先行議論

著者は始めに、語り得ぬものについての既存の分析が十分ではないことを示す。語り得ぬものについて、著者曰く「ほとんど決定的な」分析を行ったのは、アメリカの言語哲学・キリスト教哲学者である William Alston である。著者は「語り得ぬ存在者についての言明は自家撞着に陥る」と主張する Alston の議論は成功していないと結論付け、新しい分析が必要であると述べる。ところが、本書の導入であるこの時点で既に問題が生じている。著者は、上述の主張をするまさにその時に Alston 自身も「しかじかは語り得ない」という言明にコミットしていると考ええる。しかし、Alston が述べ

ているのはあくまで「語り得ぬものが存在する（かもしれない）」であり、語り得ぬものを具体的に指示できると——「しかじかは語り得ない」と——主張したのではなく自家撞着には陥っていない。更に言えば、「しかじかは語り得ぬものである」という言明は自家撞着に陥る」という Alston の主張の妥当性は著者も認めているところである。結論として Alston の主張が失敗していると示されていないため、新しい分析の必要性が感じられにくい。

3. 語り得ぬものの整合性

Alston の分析は十分ではないとして、著者は別の角度から語り得ぬものについて分析を試みる。彼は（彼が言うところの）Tarski 的な観点、認識論的観点、そして神秘主義的観点から「語り得ぬものという概念は整合的である」「語り得ぬものは存在する」と主張する。

3.1 Tarski 的観点から

著者は Tarski の真理条件を用いて語り得ぬものについての分析を行う。語り得ぬものについての基準として、「事態 A がある言語もしくは言語のクラス L において語り得ぬものであるのは、L において A が文の真理条件となるような文 S が存在しないときである」という基準を採用する。語り得ぬものの存在を肯定する上でこの基準は障害となるように思われるかもしれない。この基準からは語り得ぬもののクラスが空であることが帰結するからだ（なお、著者が描く彼の仮想敵の議論自体が妥当ではない）。しかし「語り得ぬ洞察」と「語り得ぬ洞察の無数の選言」を置換することで、語り得ぬものの可能性を残すことができると著者は主張する。しかしこの議論の正当性は非常に怪しい。著者は置換を無批判に行っているが、これは明らかに同値ではない。同値性を担保しないまま置換を行うことで導かれる帰結は、「語り得ぬものであったはずの P の洞察（の無限の選言）は、実際は語り得る」ということ——著者の批判すべき主張そのもの——であると評者は考える。

3.2 認識論的観点から

また著者は、「人間の精神が思考可能なものには制限がある」という認識論的制限（epistemic boundedness）の観点からも語り得ぬものの存在を主張する。著者は認識論的制限について Fodor の定義を用いる。そこでは発言可能性（sayability）と思考可能性（thinkability）が同値であるならば、認識論的制限から語り得ぬものの存在が帰結することは明らかである。ではこの二者が同値ではない場合についてはどうなるか。著者は、仮説を思考可能か否か、ならびに発言可能か否かの観点から四つに分類する。

すなわち「思考可能かつ発言可能」「思考可能かつ発言不可能」「思考不可能かつ発言不可能」「思考不可能かつ発言可能」の四つである。認識論的制限が語り得ぬものの存在を含意することを示すために、著者はこの第四のクラスが空であることを論じる。この議論は本書の中では比較的成功していると思われる。

3.3 神秘主義的観点から

著者が本書で最も力を入れている分析は神秘主義的観点からの概念分析である。「我々は言葉で言い表せない知を保持している」という神秘主義的な主張に関する語り得ぬものの存在を論じる。神秘主義の下に描かれる語り得なさやそれに類する概念は数多く存在するが、著者が神秘主義の観点から扱いたい語り得なさは「神秘主義者はある経験から生じる直観を（独り言としても）述べることができない」という性質である。そして神秘主義者の主張とは「自身はそのような直観を保持している」という主張だ。著者はこの主張は二つの主張から構成されていると考える。すなわち、「事態 X が成り立つ」という実質的主張と、「事態 X が成り立つという実質的主張は語り得ぬものである」というメタ主張である。

著者の挙げるメタ主張が整合的であることの十分条件とは、端的に言うと「メタ主張を棄却する理由がないこと」である。神秘主義者のメタ主張を支持する理由が神秘主義者の主張しかなくとも、その主張を棄却する理由がなく、またその主張に矛盾が生じないならば、その主張は受け入れられるべきであると著者は考える。しかしながら「棄却する理由がないならばその主張は受け入れられるべき」という十分条件は、実際には著者自身も受け入れられない強すぎる主張であろう。棄却する理由がなく矛盾が生じないからといって、空飛ぶスパゲッティモンスターやピンクのユニコーンに関するメタ主張を著者は受け入れないはずだ。また、棄却する理由がないことから導かれるのはその主張が棄却されないことだけであり、その主張が受け入れられることやその主張に対する反論が棄却されることは導かれないだろう。

実質的主張が受け入れられることについて、著者は社会認識論の観点から論じる。「事態 X が成り立つ」という神秘主義者の直観を棄却する妥当な理由は存在しないことを示す。科学者の「X が成り立つ」という言明に対して、我々は自分自身がその正誤を確認することができなくともその言明を受け入れる。そして著者によれば、科学的主張の正当性と神秘主義的主張の正当性との間には「到達可能性」の観点からは有意味な間隙は存在しない。それゆえ、神秘主義者による神秘主義的主張は、科学者による科学的主張と同様に受け入れられるべきであるというのが著者の主張だ。科学的主張と神秘体験の到達可能性に有意味な差異はないという主張も議論の余地があるが、

仮にそれを認めたとしても両者の「正当性」が同程度という結論が導かれるわけではない。科学理論にアクセスするために必要なものは観察可能な結果や論理学だろう。神秘体験にアクセスするために必要なものが何であるかについて本書には記されていないが、しかし神秘主義の基盤よりも論理学の基盤の方がはるかに強固であると著者自身も明言している。基盤の強度の違いが正当性の程度の違いに影響を与えないと考えるのは難しいだろう。結論として、著者の主張は危ういと評者は考える。

4. 語り得ぬものの分類

これまで見てきたように、著者の議論には欠陥が散見されプロジェクトが成功しているとは言いがたい。だがしかし、著者の語り得ぬものについての分析には非常に興味深い点がある。それは語り得ぬものの種類ならびに強度を分類している点だ。

著者は語り得ぬものは大きく三種類に分類できると考える。表象不可能性 (unrepresentability) 発言不可能性 (unspeakability) 報告不可能性 (unreportability) である。表象不可能性とは、ある言語がある事態を表象するための表現手段を持たないがゆえの語り得なさである。これは語り得なさの典型であり、神秘主義的語り得なさはこれに分類される。発言不可能性とは、その事態を表象するための表現手段は持つが、何らかの理由でその事態を発言することができないために語り得ぬ場合の語り得なさである。これは発言不可能の理由に応じて処理不可能性 (unabducibility) 選択不可能性 (unselectability) 遂行不可能性 (unexecutability) の三つに分類できる。報告不可能性とは、「Sである」と報告することが文Sが真であることを含意する場合、その報告が矛盾を導くために報告できない場合の語り得なさである。語り得ぬものを分類するという著者の試みは決してトリビアルなものではないだろう。「言えない」という状況は一つではないと示すことで、語り得ぬものについての議論におけるひとつの混乱を回避しうるからだ。

また著者は、語り得なさには強度が段階的に存在すると述べる。各語り得なさに対してその段階の分かれ方は幾らか異なるのではあるが、プロトタイプとしては五つの段階が考えられている。弱い語り得なさ (weak ineffability) 人間的語り得なさ (human -) 法則論的語り得なさ (nomological -) 弱い論理的語り得なさ (weak logical -) 全面的な論理的語り得なさ (logical ineffability tout court) である。人間である我々に関係する語り得なさはせいぜい人間的語り得なさまでであるように思われるが、著者は五段階の語り得なさを考案している。その理由は二点ある。一点目は、Davidson の概念図式批判からくる反論を退けるためである。Davidson の主張を受け入れると語り得ぬものという概念が非整合的であるという結論が導かれそうであるが、そうではない

ことを語り得なさの強度に応じて論ずる。二点目として、我々は実際に人間的語り得なさ以上の強い語り得なさにコミットし得るからである。特に神秘主義的主張は語り得なさの強度において多様であると著者は考える。

5. 総評

本稿で繰り返し述べてきたが、本書の議論は成功しているとはいいがたい。妥当ではない推論や、他の論者の主張への誤解が散見される。神秘主義者の述べる語り得ぬ直観は受け入れられるべき真なる直観であると主張する、という彼の最大のプロジェクトは失敗していると考えられよう。しかしながら、語り得ぬものを種類と強度で分類するという試みは非常に興味深い。語り得なさが一種類ではないという思いを自覚的にであれ無自覚にであれ抱いたことのある人は少なくないだろうが、それをこれほど明確に分類したとなると、管見ではあるが、彼の試みが初めてだろう。すなわち、語り得ぬものに関する分析の混迷の一つを消去する道をこれほど明確に示したのは著者が初めてであると言っても過言ではないだろう。議論自体は失敗に終わっているが、語り得ぬものの分析という領域に本書は一石を——小さくない一石を——投じたと言えよう。

〔京都大学大学院修士課程・哲学〕